

くまがい もりかず  
熊谷守一

1880年（明治13）4月2日〜1977年（昭和52）8月1日（満97歳没）  
画家（洋画・日本画・墨絵）、能書家で木版画や焼物の絵付けもし、自らチェロやヴァイオリンを奏でる音楽愛好家であった。作曲もしている。「画壇の仙人」と呼ばれたが、本人は嫌だったらしい。主に「二科展」に出品。画風は、写実画から表現主義（フォービズム）を経て、抽象的具象画の「熊谷様式」を確立した。売り絵は描いたことがないという。

1880年（明治13）4月2日、岐阜県中津川市付知町に事業家で地主で初代岐阜市長で衆議院議員の熊谷孫六郎の三男として生まれた。幼いころ、父の二人の愛人が住む家に、9歳にして大人のすることは一切信用できないと悟ったという。

1897年（明治30）17歳、上京し、慶應義塾普通科に入学、1年ほどで中退。

1898年（明治31）18歳、共立美術学館入学。

1900年（明治33）20歳、東京美術学校入学。同級生に青木繁ら。

1904年（明治37）24歳、東京美術学校首席卒業後、研究科に3年。

1905年〜1906年（明治39）26歳、樺太調査隊に参加。

1909年（明治42）29歳、自画像「蠟燭」が第3回文展で入賞。

1910年（明治43）30歳、母の死をきっかけに故郷に戻り、

数年間、林業、日傭などの力仕事に従事し絵はほとんど描かなかった。

1915年（大正4）35歳、上京、第2回二科展に「女」出展、以後毎年二科展に出品。友人からの金銭支援。

1922年（大正11）42歳、大江秀子（24歳）と結婚、絵が描けない日々がつづく。貧乏で日々の食事にも事欠

き、妻の質屋通いがつづく。売り絵を描く気持ちが湧かなかつたらしい。

1923年（大正12）43歳、長男、黄誕生。1925年、次男、陽誕生。1926年、長女、萬誕生。

1928年（昭和3）48歳、次男、陽（2歳肺炎で死ぬ。「陽の死んだ日」制作

1929年（昭和4）49歳、二科技塾に参加（約10年間指導）。次女、樫誕生。

1930年（昭和5）50歳、日本画をはじめ。1931年、三女、茜誕生。

1932年（昭和7）52歳、豊島区椎名町千早に妻の実家の援助で家を建てる。



豊島区椎名町千早の家  
（昭和50年代に撮影）  
現在は、改造されて  
豊島区立熊谷守一美術館  
になっている。  
館長は長女の樫氏。

以後、この家と15坪の小さな庭からほとんど出ずに、家族、猫、鳥たちと残りの生涯を過ごす。60歳近くになってから書や墨絵をはじめた。線と余白だけで喜びも悲しみも表現できる、その可能性に惹かれたという。三女茜病死。この間、各地で展覧会をし、画集も出版された。



守一筆「陽の死んだ日」1928年  
48歳、描いている自分が嫌になり  
30分で描くのをやめたという。

1947年（昭和22）67歳、二紀会創立に参加。長女の萬（20歳）結婚で死ぬ。

1948年（昭和23）68歳、55年、「ヤキバノカエリ」制作。『心』創刊

1951年（昭和26）71歳、二紀会退会。無所属作家となる。各地で展覧会開催。

1956年（昭和31）76歳、脳卒中で倒れる。晩年の30年間全く外出せず、

自宅の庭で、昆虫や花や鳥などを描きつづけた。

1964年（昭和39）84歳、5月、ダビット・エ・ガニエル画廊（パリ）で個展。

1968年（昭和43）88歳、文化勲章を辞退。（これ以上人が来てくれば困る）

1971年（昭和46）91歳、随筆集『へたも絵のうち』刊。各地で個展。

1972年（昭和47）92歳、勲三等叙勲辞退。各地で展覧会開催される。

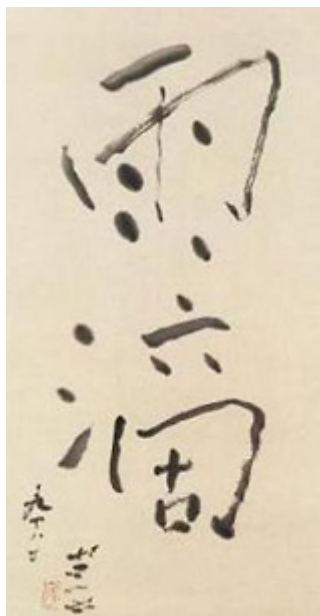
1976年（昭和51）96歳、随筆集『蒼蠅』刊。「アゲ羽蝶」（絶筆）制作。

1977年（昭和52）97歳、8月1日、老衰と肺炎のため逝去（満97歳）

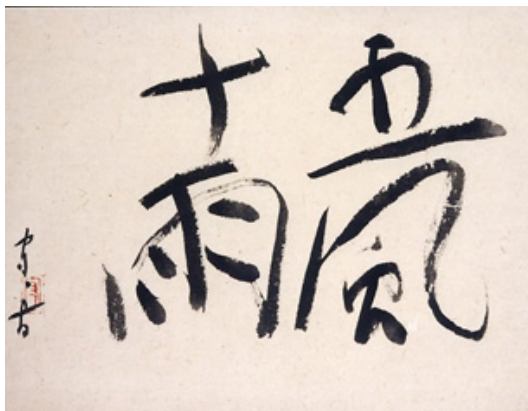


守一筆「アゲ羽蝶」油画  
1976年（絶筆）96歳

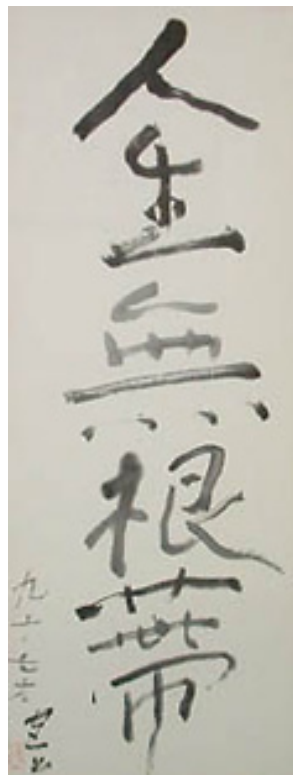




守一筆「雨滴」1977年、97歳



守一筆「五風十雨」



守一筆「人生無根蒂」1976年、  
陶淵明の「雜詩」其の一か  
ら、「人生無根蒂 飄如  
陌上塵・・・」  
人生は根蒂無し 飄として  
陌上の塵のごとし



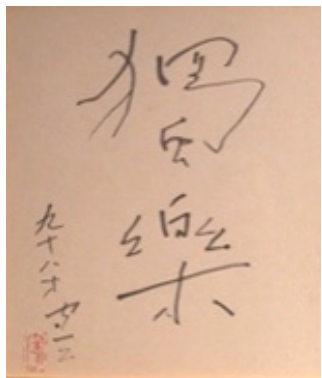
守一筆「つゆ草」1974年94歳



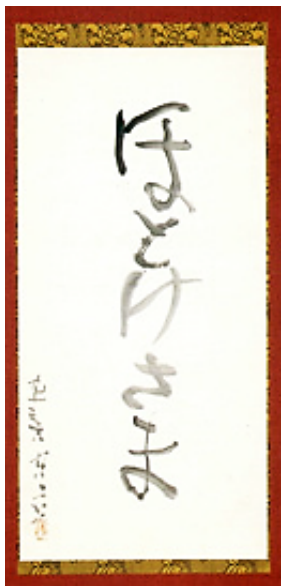
守一筆「豆に蟻」1958年78歳



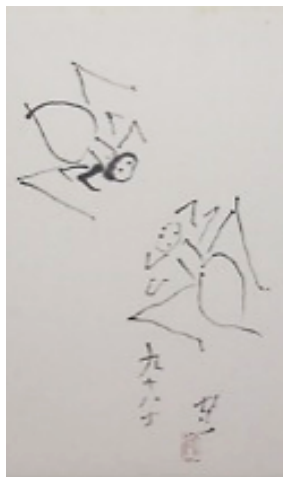
守一筆「白猫」油画1959年 79歳  
豊島区立熊谷守一美術館蔵



守一筆「独楽」1977年97歳



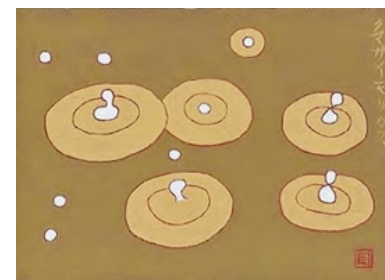
守一筆「ほとけさま」1973年



守一筆「蟻」部分



守一筆「鬼百合と揚羽蝶」



守一筆「雨滴」1961年、81歳  
愛知県立美術館蔵(木村定三コレクション)

「下手といえね、上手は先が見えてしまえますわ。行き先もちゃんとわかってますわね。下手はどうなるかわからない。スケールが大きいですわね。上手な人よりはスケールが大きい。」

「全部、大事なものは『そのまま』でそこらにいつぱいある。花一つ、蟻一つ、水一滴。そのなかで自分がなんと小さなものであるか、と」

「私は好きで絵を描いているのではないんです。絵を描くより遊んでいるのが、いちばん楽しいんです。石ころひとつ見ていると全く飽きることはありません。」

「なにも書かない白いままがいちばん美しい」(守一)

「絵というものの私の考えはものの見方です。どう思えるかという事です。単純というのは表現の方法です。どういう風に見たって絵にならなければ、形にならなくなってきませんから・・・私は写真だけでも幾らか違って、とにかくそれをぼやぼやしてやったのです。」

(守一)『心』1955年



会津八一 1881年(明治14) 8月1日〜1956年(昭和31) 11月21日(満75歳没)

歌人・美術史家・書家 号は秋艸道人、渾斎。青年時代には、八朔、八朔郎と号した。歌の弟子に歌人の吉野秀雄がいる。新潟市古町通五番町に遊廓會津屋を営む父・政次郎と母・イクの次男として生まれた。兄1人、妹4人、弟1人。早熟で、中学の頃より『万葉集』や良寛の歌に親しんだ。「書き方の時間といふもの程恐ろしいものはなかった」と回顧す。

八一の学齡期の明治20年代、「硬筆」が学童教育の場に登場、筆記用具、毛筆から硬筆へ。

1899年(明治32) 18歳、この頃から「ほととぎす」に俳句を投稿し、俳句・俳論(『蛙面房俳話』)を「東北日報」に投稿する。新潟で、来遊した尾崎紅葉と会い、坪内逍遙の講演を聴く。短冊に短歌や俳句を書く必要から書の道に入ってゆく。

1900年(明治33) 19歳、3月、新潟県立尋常中学卒業、上京。6月、根岸に子規を訪ね良寛を紹介、子規は短冊を揮毫し八一に贈った。八一は帰郷後に『僧良寛歌集全』を子規に贈る。子規は「筆蹟を見るに絶倫なり、歌は書に劣れども万葉を学びて俗気なし」と日記に記した。これが子規との最初で最後の面会だった。八一は子規から俳句、和歌、漢詩について教わり、子規の俳句革新の影響をうけ、以後句作に熱中。7月脚気で帰郷。



正岡子規 (明治33年)

8月、小学校令施行規則改正、平仮名の字体が一音一字に統一、変体仮名誕生。

朝顔画賛 あかつきのおきのすさに筆取てゑがきし花の藍薄かりき 規



子規筆「八一に贈った短冊」

1901年(明治34) 20歳、「東北日報」「新潟新聞」の俳句選者となる。俳句結社「木枯会」を起こし、『北越十句集』回覧。同人誌『若菜舟』を出す。

1902年(明治35) 21歳、4月、東京専門学校高等予科(現・早稲田大学)に入学。篆刻家山田寒山を尋ねる。子規没(満34歳)



坪内逍遙 八一が最も尊敬した恩師。

1903年(明治36) 22歳、9月、早稲田大学文学科に入学。坪内逍遙に傾倒する。

1904年(明治37) 23歳、早大でラフカディオ・ハーンからバイロン、シェリー、キーツらロマン派の詩や英文学史を学ぶ。日露戦争勃発

キーツらロマン派の詩や英文学史を学ぶ。日露戦争勃発

1906年(明治39) 25歳、7月、早稲田大学英文科卒業。この頃渡辺文子と出会う。



小泉八雲



渡辺文子(洋画家) (長谷川時雨『美人伝』大正7年刊より)

文子は八一の従妹の周子(叔父友次郎の娘)と女子美術学校の同級生。八一は周子の紹介で文子と知り合い、文子と相思相愛となったように見えた。この頃、多くの俳句、俳論を書く。この頃から意識して書の修練に励む。

9月、私立有恒学舎(現・新潟県立有恒高等学校)に英語教師として赴任。

4月、「新潟新聞」俳句選者となる。一茶の研究。この頃文子に求婚し失恋か？

2月、一茶の「六番日記」を発見する。8月、はじめての奈良旅行。奈良の仏教美術に関心を持つ、この旅が俳句から短歌へ移るきっかけとなった。八一の新しい芸術的・学問的出発点。9月、新潟市大火で家運傾く。深酒で健康を害する。

術的・学問的出発点。9月、新潟市大火で家運傾く。深酒で健康を害する。

俳句仲間と玻璃吟社を起こす。渡辺文子、与平と結婚。六朝書ブーム

六朝書ブーム



明治41年3月の八一

9月、上京し早稲田中学校の英語教師となる。

秋、早稲田大学文学会で一茶の研究を講演。

12月、郷土研究会に参加。郷土玩具収集に熱中。

健康を害する。8月、房総地方に静養旅行。

字が上手いと評判になる。渡辺与平没(24歳)

文子に求婚するも再び失恋。「龍眠会」結成



愛用の旅行カバン 布・墨書 明治末から大正にかけて使用。会津八一記念館蔵



渡辺文子画「八一像」

1911年(明治44) 30歳、健康を害する。8月、房総地方に静養旅行。

1912年(明治45年/大正元年) 31歳、7月、腎臓炎で入院。この頃、字が上手いと評判になる。渡辺与平没(24歳)

文子に求婚するも再び失恋。「龍眠会」結成



中学教師時代の八一(大正2年3月)その巨体と風貌に、新入生が「お化けだ!」とつぶやいた。



1912年頃の渡辺文子 文子は鍋木清方の美人画にも描かれたほどの美貌の女性。

1913年（大正2） 32歳、10月、早稲田大学英文科講師を兼任。最初の「潤規」を書く。

1914年（大正3） 33歳、東京小石川区高田豊川町に転居し、家を、

「秋艸堂は我が別号なり、学規は吾、率先して躬行し範を諸生に示さんことを期す。主張この内にあり、同情この内にあり、反抗またこの内にあり」（「新潟新聞」に寄せた「落日菴消息」から）

8月、「学規」四則を定める。

「拙居家塾の塾生のために定めしもの」と注記。第一次世界大戦勃発、

11月、自宅でギリシャ古代研究の講義をはじめめる。学童用鉛筆全国的に普及

1915年（大正4） 34歳、腎臓を病み、房総地方で静養。

1916年（大正5） 35歳、中村屋の相馬夫妻と知り合う。

八一は、早稲田中学校学生であった相馬夫妻の長男安雄を落第させた、

いさぎよく落第させたことを徳として、八一にお礼を言うため相馬夫妻が八一を訪ねて来た。この事が交友の始まりらしい。

中村屋の看板や包装紙に八一の書が残っている。漱石没（満49歳）

1918年（大正7） 37歳、3月、早稲田中学教頭となる。文子、亀高五一と再婚。

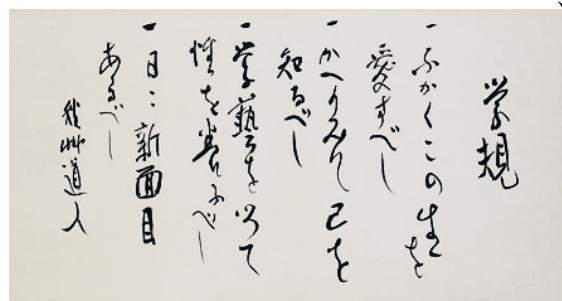
1919年（大正8） 38歳、豊川町の別の家に転居。文子、「朱葉会」創立に参加。文部大臣が毛筆廃止論

1920年（大正9） 39歳、9月、日本希臘学会を創立、会長となる。奈良各地を歩く。「潤規」を書く。

1921年（大正10） 40歳、教頭排斥運動起こる。静養と旅に明け暮れる。西国放浪。写真家、小川晴暘と邂逅。



大正7年12月の八一



八一筆「学規」

### 学規

- 一、ふかくこの世を愛すべし
- 一、かへりみて己を知るべし
- 一、学藝を以て性を養ふべし
- 一、日々新面目あるべし

秋艸道人

1918年（大正7） 37歳、3月、早稲田中学教頭となる。文子、亀高五一と再婚。

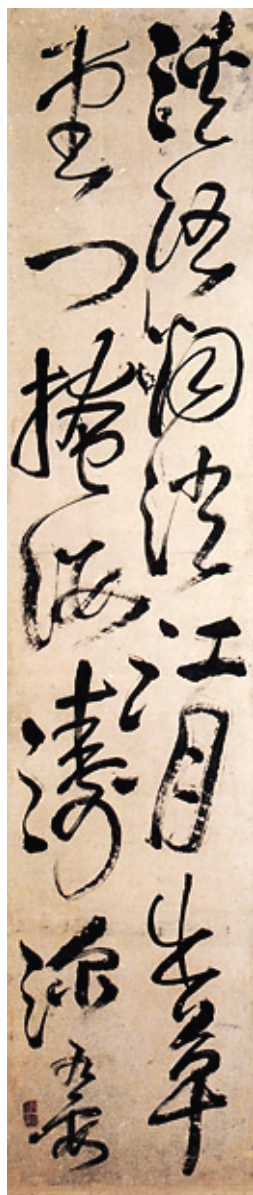
1919年（大正8） 38歳、豊川町の別の家に転居。文子、「朱葉会」創立に参加。文部大臣が毛筆廃止論

1920年（大正9） 39歳、9月、日本希臘学会を創立、会長となる。奈良各地を歩く。「潤規」を書く。

1921年（大正10） 40歳、教頭排斥運動起こる。静養と旅に明け暮れる。西国放浪。写真家、小川晴暘と邂逅。

大正10年11月16日、八一は、ひとり東京を立ち、大阪から海路で大分に渡り、中津の大雅堂（大分県中津市新魚町の自性寺内）、白杵の石仏群などを調査し太宰府から熊本、長崎、安芸の宮島、尾道を経て帰京。明けて大正11年1月、ふたたび奈良から高知、宿毛から白杵へ渡り、石仏を調査し、2月18日帰京。この、大正10年から11年にかけて百日に及ぶ旅によって、「放浪陰草」が生まれ、大自然や古代美術のおおらかな心にあふれ、苦悩や腎臓障害などからも解放されたが、何よりも大きな出来事は自性寺で池大雅の作品に出合い、書家として自信を持ったことであつ

溪路烟消江月出 草堂門掩海濤深 九霞（溪路烟消えて江月出づ 草堂門掩して海濤深し 九霞）



池大雅筆 紙本墨書 襖装  
132.4×58.6 cm 自性寺蔵





銭瘦鉄画「落合山莊」



臼杵の石仏

1922年（大正11）41歳、新年から奈良、四国、九州を旅する。



池大雅画「蟠幹香雪図」紙本墨画 襖装  
132×58 cm 自性寺蔵

7月、早稲田中学教頭を辞任、一教員となる。  
8月、東京郊外の落合村に転居（落合秋艸堂）。  
市島春城の好意で落合春艸堂に暮らすようになり、健康も回復し、学芸に専念し、訪問客もふえる。この頃から羊毛筆の使用が多くなる。



下落合の秋艸堂

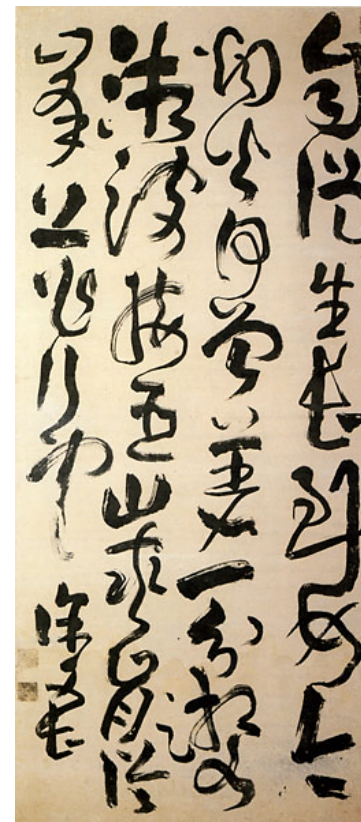
しげりたつ かのこのまの あおぞらを  
ながるくもの やむときもなし 八一

八一は、音楽とともに美術教育にも熱心であった。彼は、早稲田中学の美育部の伝統を守ったという。この美育部からは中村薺（なかむらつね）、萬鉄五郎（よろづていつろう）、曾宮一念（そみや 一念）、内田巖（うちだ いわ）、小泉清らが育った。  
八一は、  
「絵を描く事は心の中からの止むべからざる要求を本にして我々の行ふ修養の一つ」と説いた。

10月、ふたたび奈良を旅し、多くの歌を詠む。小川晴暘（せいがう）、飛鳥園を創業。



池大雅筆「李白・鳴皋歌句」  
紙本墨書・襖装 130×53 cm  
自性寺蔵



池大雅筆「徐渭・水仙蘭詩」  
紙本墨書 襖装 133×58.2 cm  
自性寺蔵

「自己が書家として開眼し、その独自性の自信を得たのは、この自性寺の大雅との出会いのときからである」（植田重雄『秋州道人会津八一の生涯』）

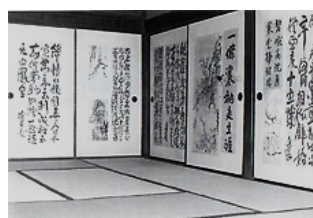
池大雅に感激した八一は「自性寺の大雅堂にて」4首を詠んだ。

むかしびと こころゆららに  
ものかきし ふすまにたてば  
なみだながるる

いにしへの くしきゑだくみ  
おほかれど きみがごときは  
わがこひやまず

なほざりに ゑがきしらんの  
ふでにみる たたみのあとの  
なつかしきかな

いにしへの ひとにありせば  
もろともに ものいはましを  
ものかましを



中津・自性寺の大雅堂

かすがのに おしてるつきの ほがらかに  
あきのゆふべと なりにけるかも（春日野にて）

おほてらの まろきはしらの つきかげを  
つちにふみつつ ものをこそおもへ（唐招提寺にて）

しぐれふる のずゑのむらの このまより  
みいでてうれし やくしじのたふ（薬師寺）

あめつちに われひとりめて たつとき

このさびしさを きみはほゑむ（法隆寺・夢殿救世観音に）



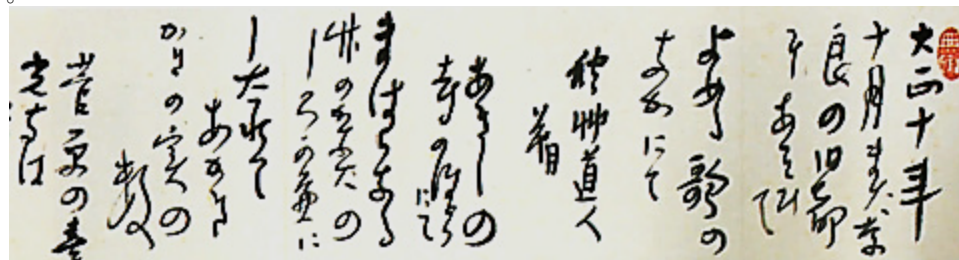
法隆寺・夢殿・救世観音像



春日山石窟にて（大正 11 年 1 月）



唐招提寺・金堂の柱



八一筆・豆本「大正十年十月また奈良の旧都にあそびてよめる歌のなかにて」部分 天地 9 cm  
八一の歌は、「調べ大きく、荘重で、仏像や寺院への純粋な讃仰の心が貫かれている」（来嶋靖生氏）

1923年（大正12） 42歳、3月、日本希臘学会を解消し、

奈良美術研究会を創立、会長に。8月、室生寺の撮影取材開始。関東大震災 12月、中村彝に面会。

1924年（大正13） 43歳、1月、奈良へ旅する。12月、中村彝没（37歳）

11月、『室生寺大観』刊行。

12月、第一歌集『南京新唱』（春陽堂）刊行。

歌人として無名に近い八一の第一歌集は、ほとんど反響

はなかったが、斎藤茂吉や、後年唯一の歌の弟子と

八一が認めた吉野秀雄らは八一の歌を評価した。

1925年（大正14） 44歳、3月、奈良から吉野を旅する。

早稲田中学校を辞す。

4月、早稲田大学付属高等学院教授となる。

11月、奈良を旅する。

1926年（大正15／昭和元年） 45歳、3月、奈良旅行。

4月、早稲田大学文学部講師となり東洋美術史を担当。

1927年（昭和2） 46歳、1月、『潤規』（作品の価格表と規定）をつくる。

1928年（昭和3） 47歳、新潟に父の病氣を見舞う。

6月、『奈良美術史料推古篇』（武蔵野書院）刊行。

10月、奈良の旅。

1929年（昭和4） 48歳、1月、奈良の旅。

4月、古美術研究誌『東洋美術』創刊。6月1日、父死去（76歳）

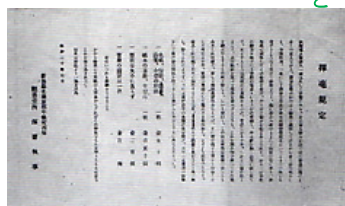
夏、「壺中居」を揮毫。銭瘦鉄来日、10月、秋艸堂に来訪。

1930年（昭和5） 49歳、1月、早稲田大学東洋美術史学会を創立、会長となる。

11月、長野県東筑摩郡朝日小学校で「推古時代美術の研究」を講演。



『室生寺大観』



八一の「揮毫規定（潤筆規定）」色紙・短冊など1枚、金50円、半切1枚、金150円などと書かれている。（これは昭和20年のもの）



「南京新唱」装幀・八一漢字仮名交じり表記



唐招提寺で（昭和5年）絵付けしている八一

1931年（昭和6）50歳、2月、早稲田大学文学部教授となる。

8月、奈良を旅する。

9月、満州事変勃発 頽廢したアカデミズムに倦む

11月、奈良、神戸を旅する。

1933年（昭和8）52歳、5月、『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』刊行。

11月、私家版歌集『南京余唱』刊行。作歌に心開く

この年から高橋きい子が家事をみる。書道に心開く

1934年（昭和9）53歳、4月、私家版歌集『村莊雜事』を自筆の書で刊行。

7月、文学博士の学位を受ける。

10月、早稲田大学恩賜記念館に東洋美術史研究室を設置。

1935年（昭和10）54歳、2月、逍遙没。

7月、東京市淀橋区下落合に転居（通称目白文化村）

斎号を滋樹園、翠漣亭と称す。木曜会誕生。

1937年（昭和12）56歳、2月、熱海に「逍遙先生筆塚」の碑を建立。

7月、日中戦争勃発

1938年（昭和13）57歳、4月、早稲田大学文学部に芸術学専攻科設置、

主任教授となる。改造社の『新万葉集』巻四に短歌を掲載。

10月、学生引率で奈良地方を旅行、昭和18年まで毎年行う。

1940年（昭和15）59歳、5月、歌集『鹿鳴集』刊行（祖国の真の美しさを知るための

必読書とされたらしい。これは『南京新唱』『南京余唱』

などにその後の歌を加え編集された。第一歌集『南京新唱』

のときとちがって、大好評で多くの讃辞が寄せられた。）

12月、母死去（79歳）。

1941年（昭和16）60歳、5月、銀座鳩居堂で還暦記念書画展開催（40余点完売）。

8月、書画図録『渾斎近墨』刊行。「潤規」をつくる。

12月、太平洋戦争勃発



『鹿鳴集』本扉  
ほんとうびら  
全首平仮名表記



八一筆「及其至也・不亦樂哉」楹聯 昭和16年（1941）、春吉田憲一郎刻 會津八一記念館蔵  
其の至るに及ぶや、亦た樂しからずや 秋艸道人題

「本集の歌は通巻殆ど仮名をもって綴れり・・・」

（『鹿鳴集』例言）

「仮名のみにて記しても、尚ほ人のたやすく理解しける如き歌作らばやと、己を鞭ちつつある」（『会津八一全歌集』例言）



目白文化村秋艸堂にて  
昭和10年7月



高橋きい子  
昭和10年7月

1943年（昭和18）62歳、3月、東大寺大仏讃歌十首を献ずるため奈良に行く。  
10月、春日大社境内に「かすがのに」の歌碑建立。  
11月、学生を引率して奈良見学中、高野山で発熱、  
定宿である日吉館で静養、帰京後肺炎になり、中耳炎を併発、数ヶ月間病臥。

「八一の歌は、他の歌人になじ流麗な調べをもっている。それは口に吟じ、毛筆をとって書に記すということと無関係ではない。歌は歌うべきものであるという信念があり、その表記が正しい、意味に依存しがちな近代短歌への批判を内包するものなのである。」  
（来嶋靖生氏）

八一は、戦争とは無関係に、自己の学問と創作に打ち込んでいた。

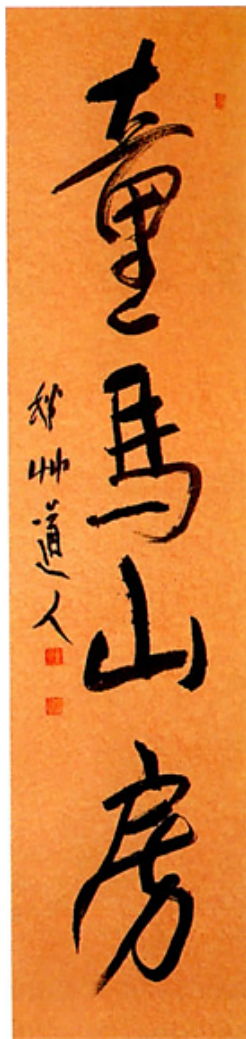
昭和18年秋、学徒徴兵猶予が停止され、同年12月から学徒動員が行われ、続けてきた学生たちとの奈良の見学旅行も、この年が最後となった。

かすがののこぬれのみみぢもえいでよ またかへらじと ひとのゆくひを 八一（入営する学生のために詠んだ歌）



『渾斎随筆』

1942年（昭和17）61歳、4月、新薬師寺に歌碑第一号「ちかつきて」建立。  
10月、『渾斎随筆』刊行。



八一筆「童馬山房」昭和20年  
「童馬山房」は斎藤茂吉居士の齋号。八一が茂吉邸を訪問した際に揮毫したうちの1枚。八一は昭和20年4月、茂吉と初対面し、防空壕で酒を酌み交したという。



『山鳩』2種 4頁の和綴じ本

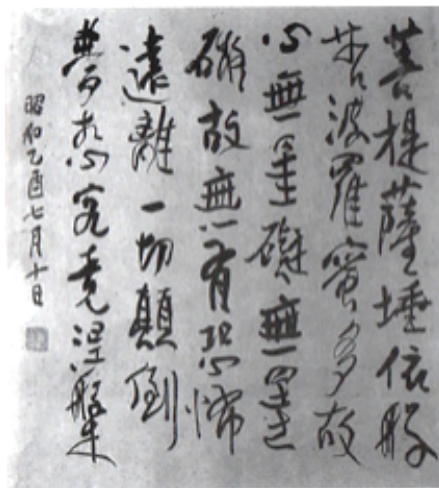


観音堂全景

1945年(昭和20) 64歳、3月10日、東京大空襲 4月14日、空襲により滋樹園全焼。

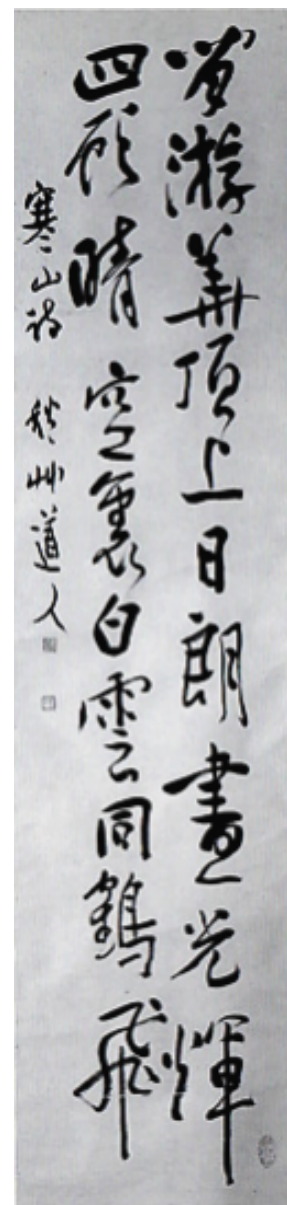
9月、歌集『山光集』刊行。

1944年(昭和19) 63歳、2月、高橋きい子を養女とする。



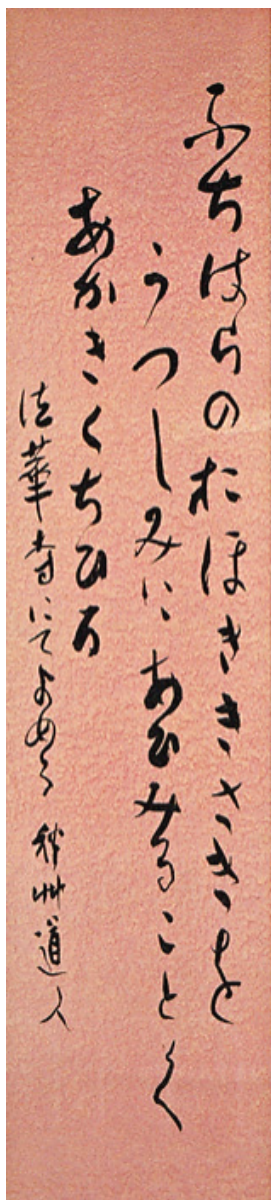
八一筆「般若心経」の一節 昭和18年7月10日

戦争末期なのに、八一は現実離れた詩文を揮毫している。  
このような表現世界を「沈鬱蕭散」というのか。  
まぢゆけば ばうくがうの あげつちに  
をぐさあをめり あめのいとまを 八一  
わがやどの かべのふるぶみ くれなぬに  
もえなむさまを おもふこのころ 八一  
ひとつもの かさつゑつきて あかきひに  
もえたつやどを のがれけるかも 八一  
「歌ころが、ありのままに現れて居るか居らぬか、を書の良し  
悪しの判定の基準としている・・・」(疋田寛吉氏)



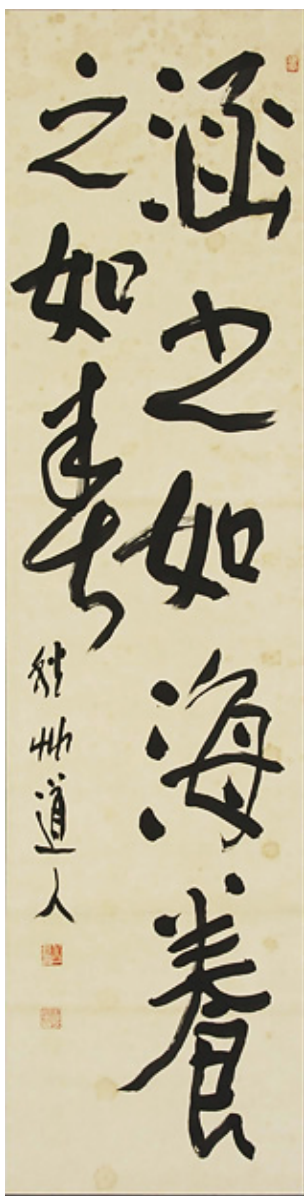
八一筆「寒山詩」

閒かに華頂の上に游べば 日朗らかに昼光輝く 四顧すれば晴空の裏 白雲鶴と共に飛ぶ 寒山詩 秋艸道人



一筆 半切 昭和 25 年頃  
大き後は光明皇后のこと。

ふちはらの おほきさききき うつしみに あひみる」とく あかきくちびる 法華寺にてよめる 秋艸道人



一筆「涵之如海、養之如春」  
126×31.8 cm 早大図書館蔵

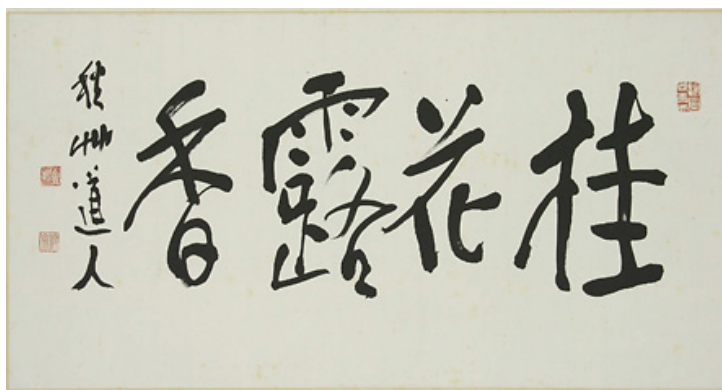
これに涵すこと海の如し 之れを養うこと春の如し 秋艸道人 《漢書》より



一筆「秋艸堂」扁額 昭和 22, 3 年 33×87.58 cm 新潟市會津八一記念館蔵



一筆「獨往」軸、昭和 20 年代 28.5×57.5 cm 新潟市會津八一記念館蔵



一筆「桂花露香」軸 34.9×66.6 cm 早稲田大学図書館蔵

桂花は露も香し（禅語）桂花とはモクセイのこと。



『寒燈集』昭和 19 年 6 月以後の 212 首を収録。

1947 年（昭和 22）

66 歳、



会津蘭子（宮城道雄門下で琴をよくした人）

1946 年（昭和 21）

65 歳、

3 月、京都大丸にて個展開催。

5 月、「夕刊ニヒガタ」創刊され、同社社長に就任。

7 月、伊藤文吉別邸（現・北方文化博物館新潟分館）内の洋館に転居。ここを「南浜・秋艸堂」と呼び、

永眠するまで暮らした。中山蘭子が家事をみる。

4 月、歌集『寒燈集』刊行。「書道について」講演。

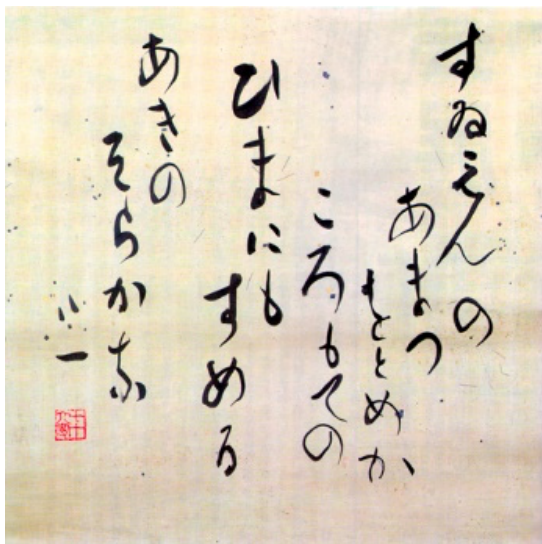
5 月、『遊神帖』刊行。「いろは」、「あいうえお」に。

6 月、新潟の小林百貨店で近作書画展開催。

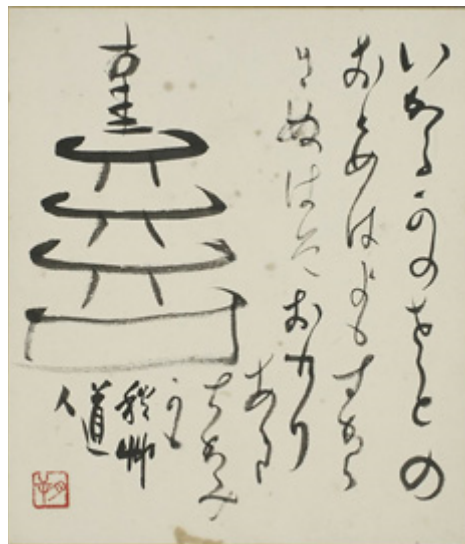
くわんおんの だうのいたまに かみしきて うどんのかびを ひとりほしをり 八一



北方文化博物館新潟分館（八一終焉の地）



八一筆  
すゑんの あまつをとめか ころもての  
ひまにもすめる あきのそらかな 八一  
薬師寺東塔を詠んだ歌。



八一筆「自画自讃」昭和5年(1930)色紙  
21.1×18.2 cm 早稲田大学図書館蔵  
「いかるがの さとのおとめは よもすがら きぬはたおれり あきちかみかも 秋 艸道人」 百万塔の画が描かれている。連綿し変体仮名もつかっている、若書きの書。



執筆中の八一(昭和22年)

「・・・草仮名は・・・公卿とか官女とかいふ、およそ今日の日本人とは、生活も、感覚も、気分も、かけ離れた人たちの手で出来たもの・・・」「今日は今日の仮名を見出して、これを実用にもし、その中から芸術をも見出して行くべきである。」

「芸術として書くからには、字さへ上手に書けば文句は何でもいいといふわけには行かない。その中に盛ってある思想も感情も、まづ自分のものでなければいけない。自作でないにしても、自分でほんとに感動したものでなければならぬ。」

「筆法といへば、何かいかめしい法則のやうなものがあるやうに、普通には思はれやすいが、書道ばかりでなく、何事にも、最初から法則などいふものがあるものではない。」

「今日にいふところの筆法といふものは、もとより便宜上のもので、決して根本的のものでない。書道にもしつと大切なものがあれば、骨法とでもいふべきものが、あるのではないかと私は思ふが、・・・」

(会津八一「現代の書道」昭和25年より)



八一、昭和25年、自宅で撮影：土門拳

1948年(昭和23) 67歳、5月、早稲田大学名誉教授となる。日展に書が参加

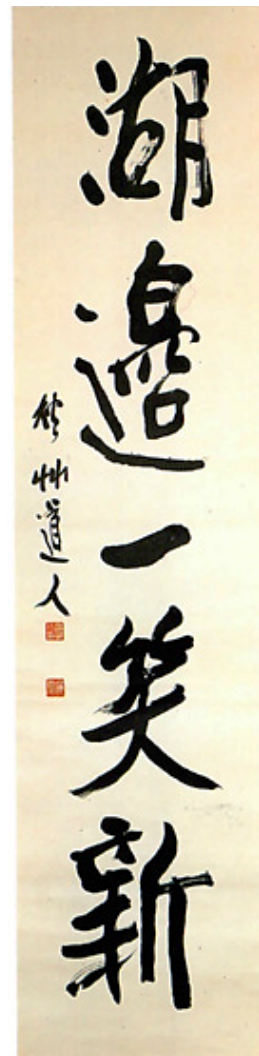
1949年(昭和24) 68歳、3月、新宿中村屋にて書画個展開催、昭和26年以降毎年開催。

早稲田大学図書館内に会津博士記念東洋美術陳列室開く。

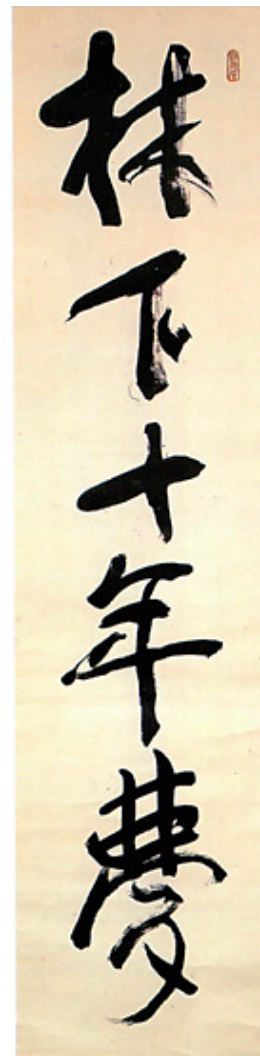
5月、中山蘭子を養女にする。

西川寧らにより日展審査員候補にあげられ、一旦、八一は同意したが、尾上柴舟の猛反対にあい実現しなかった。西川らはせめて招待出品でもと考えたらしいが、八一は日展への関与を一切拒絶した。11月、新宿中村屋にて近作書画展を開催。

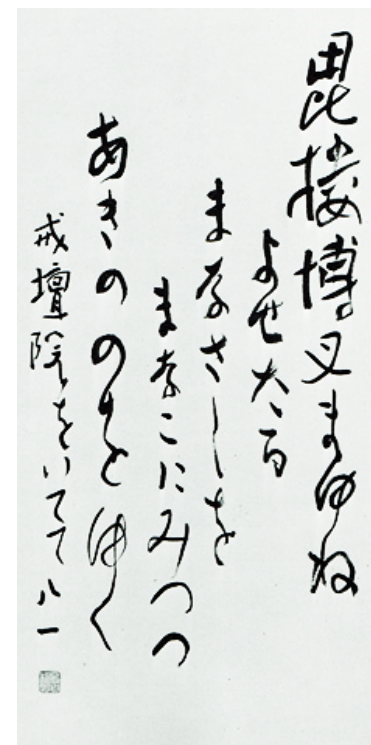
12月、「夕方ニヒガタ」廃刊。山陽新聞社主催、八一の個展のための作品焼却事件。



八一筆「林下十年夢 湖邊一笑新」1949年11月、中村屋蔵新宿中村屋での書画個展出品作。『禅林語句集』より。対聯「りんかじゅうねんのゆめ こへんいっしょうあらたなり」秋艸道人  
この作品は日展に出品しようと予定して書いたものらしい。



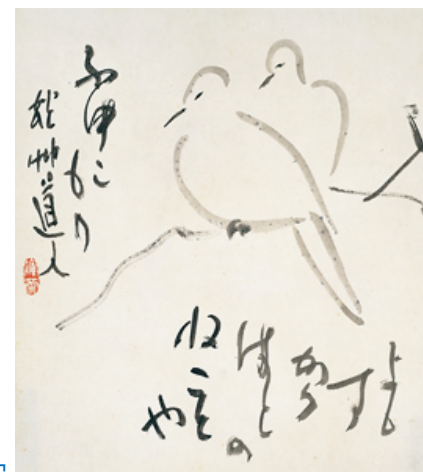
毘樓博叉 まゆねよせたる まなざしを  
まなこにみつ あきののをゆく 戒壇院をいでて 八一



八一筆「毘樓博叉」



「奈良東大寺戒壇院  
戒壇堂広目天」部分



八一自画讃「よもすがらはとのねごとや  
ふゆごもり 秋艸道人」



執筆中の八一（昭和25年11月）

「書家たちが、ほんとに物を書いて、この世の中に貢献したいならば、全くあたまで切り替えて、ペンキ屋の持つ尖の平たいブラッシの筆法や、万年筆や鉛筆の、細い針金のやうな線のために、能率の高い筆法を工夫してゐなければならぬ。その硬い筆の吐き出すところの細くて硬い線の中から、どうしたら芸術を見出し得べきかに、心を尽くさなければならぬ。これこそ在来の毛筆による筆法の研究よりも、もっと意味の深い研究であらう。日展には別に篆刻もあるが、これは印刀で石や銅に篆文を刻む。これはもとより一つの立派な書道である。このやうに、ペンや鉛筆で硬い西洋紙の上に物を書いたものが、日展の書道部の一つの種目となる日が遠くないやうにしたいものだ。」（会津八一「現代の書道」昭和25年1月より）



八一筆「心」色紙 個人蔵  
八一於新潟秋艸堂



八一筆「無」色紙 個人蔵

「……目を惹くものがあつた。それは……審査に当たる大家たちの新しい試みらしく、……文字の形をことさらに歪めたり、……字配りをことさらに不均整にしたり、……一本一本の線の引き方に珍しい手ぶりを見せたり、……一連の文字の中で、目につくほど墨色の濃淡を分けたり、……作者たちは……筆法、書法の……ヴェテランで、……この種類の作品は……遣りつばなしげに見えて、実はその底に、ほんとに細かい技術が働いてゐる。だから随分自由に見えても、若さも明るさもなく、朗かさもない。……それは玄人の遊びとか、通人の洒落とでもいふべきもので、……われわれが今の国民のために必要な芸術としての書道を、この中から見出すことは、むづかしいであらう。ことに、この人々の作には、字形のことさらに不明瞭に書かれてゐると思はれるのが多い。これも重大なことだ。書道は文字を書く。その文字は明瞭でなくてはならない。……意味の解らないところや、線を書き込んで、その中から何かの感じさへ出てをれば、それでいいといふのは、画だけのことで、書道は明瞭でなければならぬ。……明瞭でない書道でないといひたい。現代の社会が、どんな文字を求めてゐるかは、書道の展覧会などよりも、都会の大通の看板を見て歩いてわかる。……書物や雑誌の表紙を見てもよくわかる。そこに現代の求める明瞭がある。この明瞭を犠牲にせずに、書道の芸術を樹立してもらひたいものだ。……今の書道界の人たちは、通用すべき漢字の数や筆画について、誰よりも先だって、……国民の向ふべきところを示してほしいものだ。……」

（会津八一「現代の書道」昭和25年1月より）



『會津八一全歌集』  
単語単位平仮名分  
から表記（切字法）

1951年（昭和26）70歳、  
きくうとおりたつに  
はのこのまゆもたま  
たまとほきうぐひすの  
こゑ

1月、新潟日報社賓となる。  
『中央公論』（2月号）に評論「現代の書道」を発表し、  
日展書道を批評した。

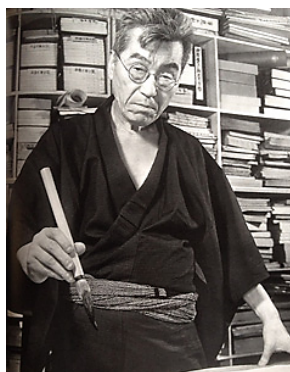
3月、仙台で「書道の諸問題」を講演。

6月、朝鮮戦争勃発

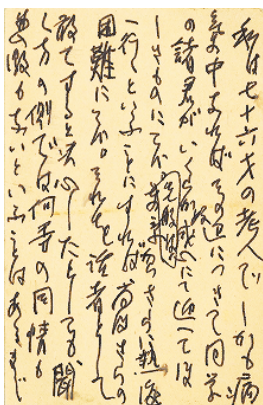
3月、新潟市名誉市民に推薦される。

『会津八一全歌集』刊行。はじめての入歯。

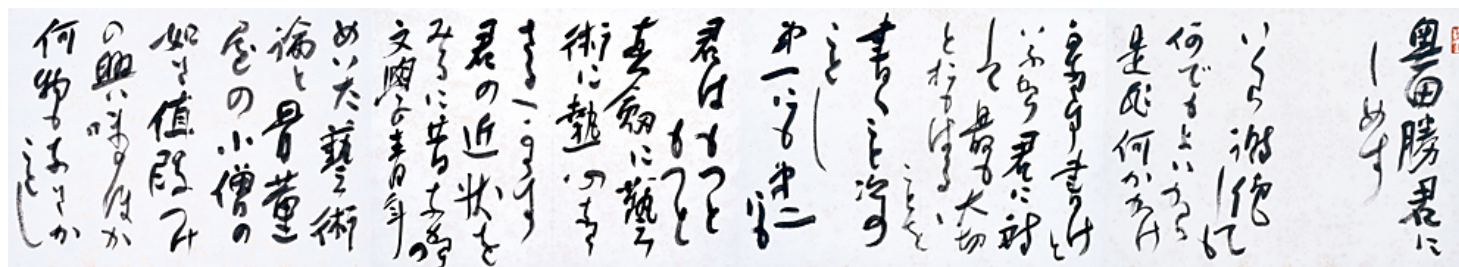
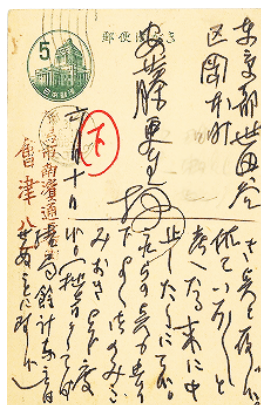
5月、読売文学賞受賞。



執筆中の八一（昭和25年頃？）土門拳撮影

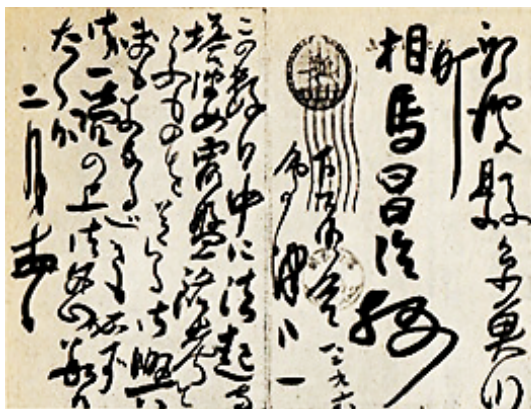


八一筆「安藤更生宛はがき」昭和31年6月10日  
安藤の見舞状への返事。新潟市会津八一記念館蔵



八一筆「與奥田勝書」昭和17年(1942)5月11日書簡部分 15m84cm×?  
小さな栗の木美術館蔵(信州小布施町)

「奥田勝君にしめす。いくら謝絶しても何でもよいから是非何かかけかならず書けといふから君に対して最も大切とおもはるゝことを書くこと次のごとし。第一にも第二にも君はもつともつと真剣に藝術に熱心ならざるべからず。君の近状をみるに昔ながらの文明子青年めいた藝術論と骨董屋の小僧の如き値段つけの興味のほか何物もなきがごとし。・・・美術家は、己が作品が何よりも雄弁に美術の精神を發揮顯彰するが故に、議論に訥なりとも少しも恥づべきにあらず。むしろ立派なる態度といふべし。美術家はすべからず空論に日を送ることをやめて、もつと謙虚に、もつと熱心に、自然を又人生を諦観し、努力してやまざらむことを要す。然らずんば、何を以て美術家などと称することを得ん。空論家とか空談家とでもいふべきなり。即ち天下に無價値なる存在となるべし。・・・予は藝術に於て何人の説明も教授も受けず、受けても遵奉せず、みだりに人を訪問せず、みだりに會合に出席せず、貧乏のうちに志をはげまし、曲りなりにも今日此の老人に至りて、やうやくいくらかの自覺を得たり。君もし予以上の人ならば、予が門に來りて再び道を問ふことなかれ。もし又眞に予によりて益を請けむと思はゞ、この帖に書きしところを熟読玩味し、日々反省して、大に新面目を示さるべきなり。・・・」



八一筆「相馬御風宛はがき」昭和6年2月24日

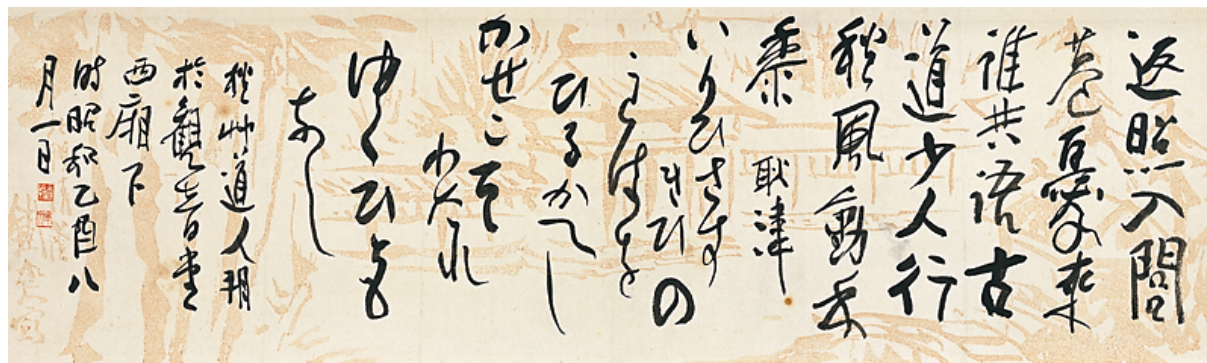
新潟県糸魚川町  
相馬昌治様  
下落合一二九六  
会津八一

この数日中に法起寺  
塔婆婆露盤銘者と  
いふものを送る。御興  
味もなかるべきも必ず  
御一読の上御感承り  
たく候。  
二月十四日

「この頃、会津八一の書簡体が完成の域に達したのではないかと思われる。」(長坂吉和氏)



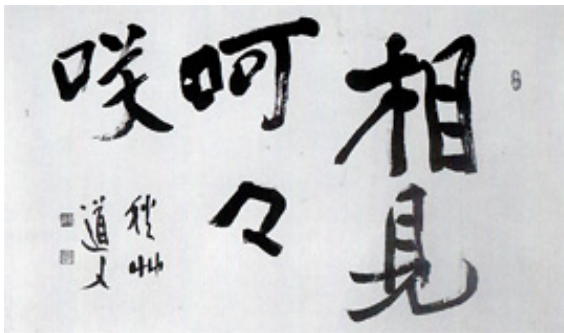
奥田勝作「恩師會津八一先生の像」(眼鏡は紛失)



八一筆「漢詩の短歌翻訳」1945年(昭和20)8月1日 『唐詩選』から「返照入閭巷」「いりひさす」 會津八一記念館蔵

(秋日)  
返照入閭巷  
憂來誰共語  
古道少人行  
秋風動禾黍  
耿津  
(秋口)  
返照は閭巷に入り、憂ひ來つて誰か共に語らん、古道は人の行くかなし、秋風は禾黍を動かす  
耿津  
いりひさす  
きびのうらはをひるがへしかぜこそわたれゆくひともし秋艸道人朔於觀音堂西廂下時昭和乙酉八月一日

富岡鉄斎の面を刷った詩箋に書かれている。漢字と仮名が調和した、会津八一の傑作。



八一筆「絶筆」2点のうちの1点 昭和31年（1956）禅語  
「相見呵々咲」しょうけんしてかかとわらう



八一遺愛の文房具 新潟市会津八一記念館蔵



新潟市会津八一記念館



早稲田大学会津八一記念博物館

「かれは、みずから、東洋画の伝統をふまえて、書、詩、画一致の境地を、新しく創りだそうと意識していた。書と詩と画とを分離してしまっている書壇の、文学を喪失した書家への、はげしい批判の上にたつての営みであつた・・・」（宮川寅雄『会津八一』より）

1956年（昭和31）75歳、

4月、高村光太郎没 八栗寺鐘銘揮毫に体力を消耗した八一は急激に体調を崩した。

11月21日、冠状動脈硬化症で永眠。

晩秋、讃岐の五剣山八栗寺の鐘銘揮毫。

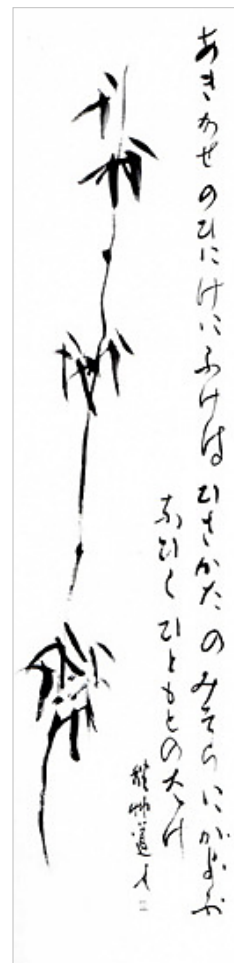
「純粹で孤獨な八一の一面を垣間見せた事件である」（長坂吉和氏）

1953年（昭和28）72歳、2月、宮中歌会始の儀に召人として臨席。  
10月、『自註鹿鳴集』刊行。  
1954年（昭和29）73歳、8月、杉本健吉との共著『春日野』刊行。  
1955年（昭和30）74歳、山陽新聞社社長の谷口氏、新潟日報社首脳と懇談

杜賓の八一も同席したが、一言も口をきかなかったという。

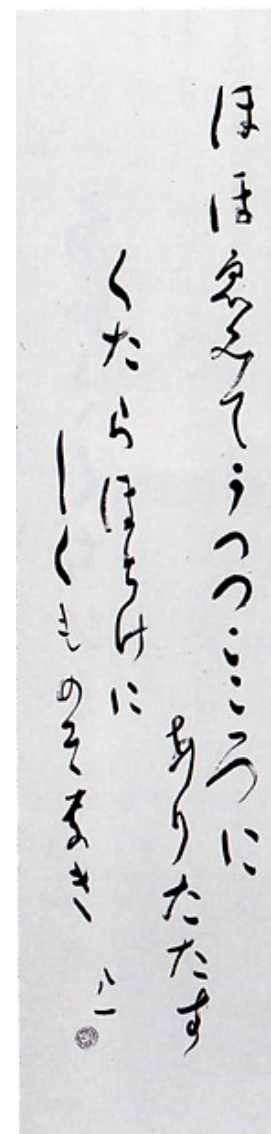


作品を選ぶ八一  
1950年（昭和25）11月

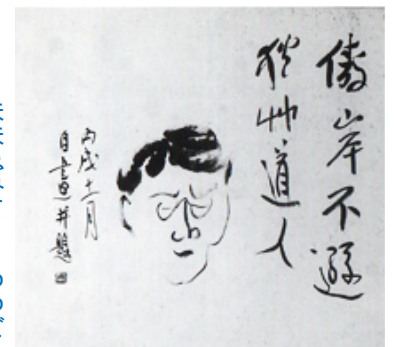


八一筆「条幅」自画題歌  
135.0×32.4  
早稲田大学會津博士記念東洋美術陳列室蔵

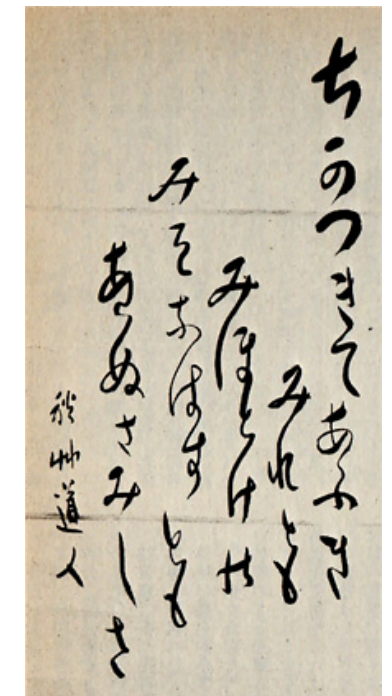
あきかぜの ひにけにふけば ひさかたの みそらに（かよふ）なびく ひとものたけ 秋艸道人



八一筆「条幅」  
135.0×32.5 cm  
早稲田大学會津博士記念東洋美術陳列室蔵



八一自画賛「傲岸不遜」丙戌（1946年）



八一筆「新薬師寺歌碑草稿」  
ちかつきて あふぎみれども みほとけの みそなはずとも あらぬさみしき 秋艸道人



ごけんざんやくりじしやうめいたくほん  
五剣山八栗寺 鐘 銘拓本

「・・・このお寺の釣鐘に彫りつけた文章の文字を、現代の我々が日常用ひてゐる仮名の交つた文章にする事になつた。・・・この銘文の筆者として第一に私が氣をつけたことは、・・・美辭麗句式にならぬやうにすること。・・・出来るだけ行を跨がずに續いて一目で読めるやうにした。・・・實際何を云つて居るのか、読む人にわからぬやうなら、何よりも大失敗だと思つたので、私はそんなことに一番氣をつけた。そして、まるで学問などのない、小学生が読んでも、大体の意味がわかるやうにしたいと思つた。・・・」  
(会津八一隨筆「八栗寺の鐘」より)



昭和22年4月、砂に字を書く八一  
(新潟市寄居浜にて)

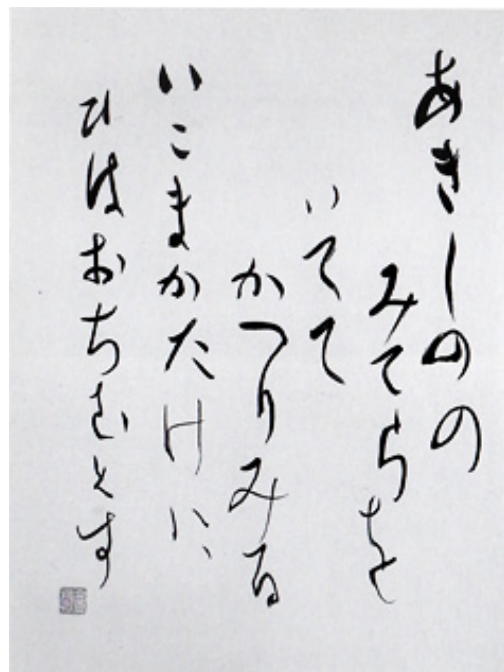
「・・・字といふものは遠方にをる人に自分の思ふことを知らせる、あるひは後世の人にいま書いたものを知らせる、さういふことが根本的に必要なんだ。それでなかつたら何も字といふものは要らないんです。字といふものは実用のもんだ、実用のもんだだけど書きやうによつては、美的にもできるといふところが書といふものの持つ特殊の性質なんです。・・・」  
(会津八一「東洋文藝雜考」より)

「予は書画に於て師承することなし。ただ群書を読み、ほぼ変遷の大勢を知り、伝世の名蹟にして、寓目せるものまた多きによりて、その間、おのづから会得するところあるが如きのみ」  
(会津八一「遊神帖」自序より)

「字というものは、自分の考えを人に知らせるためのものであり、同時にまた、人の考えを自分が知るためのものである。だから上手下手ということよりももっと大切なことは、お互いの意志を伝えるために最も適した形式をもつたものこそ、人生において一番大切な文字であろう。私は、とても字は上手にはなれないけれども、・・・人にわかるやうな字を書かなければならぬ。・・・」  
(昭和22年、会津八一「書道について」講演より)

「・・・国民生活の日用品としては、漢字に仮名を交ぜたものを使つて居ります。それであるのに、いざ展覽会となると、主として漢字を書く書家と、主として仮名を重しとする書家とが、たがひに違ふ氣持で、そして違ふ理想で字を書いてゐるのであります。それは仮名を書く人は、今から六七百年前の・・・有名な書き手の流儀を墨守してゐる。草仮名とか、大和仮名とかいふものを、極めて心やすく何の心配もなく、うかうかと書いてをられる。これに対して、漢字を書く方は、絶対に仮名を入れるに、漢字ばかりを、これもまた支那風に安心して書いてをられる。・・・私は歌をよむときに、仮名だけで綴るので、そのためにやや有名であるが、しかしその歌集の序文や跋文は、仮名と漢字を交へて書いてゐる。・・・七百年も八百年も前の或る個人の書き方、或る流派の書き方、それも公卿とか歌よみとかいふ人達の、すなはち特殊な階級、団体の書き方、さういふものを、現代の、生活をしてゐるものに、強ひることの馬鹿らしさ、と同時に、それに対して支那人に非ざるところの日本人に、できるだけ支那人の氣分や理想通りに書けといふ統制を加へることの馬鹿らしさ。・・・私は実用といふものが一番高尚であると思ふ。実用ばかりではいかん場合に、少し実用になんとか工夫を加へてこれを美的に導く。それくらゐのところを總てのものはやめてゐたいと思ふ。・・・去年秋の日展に行きますと、何とも名状すべからざる字がある。成るべく人が判らないやうにしてゐる。履き古した草鞋に墨をつけて、屏風を撫でたやうな字がある。・・・いくら人が見ても、何をいつたつて判らせるものかと固く覺悟してゐるやうな字で、実にこれは間違つたことだと思ふ。・・・」(会津八一「書道の諸問題」昭和25年3月18日の講演より)

「・・・人が見ると同時に、書いてあることが頭に入る。・・・何人の思想でも感情でもが、発した人から受け取る人へ、何等の抵抗なしに伝えられるのは、この明朝体活字であらう。・・・知識を紹介するのが文字の一番大切なことであるから、何という字だかわからないけれども面白い字だということでは、すでに邪道であらう。・・・どこまでも人にわかる字を書こう。・・・二つの練習を経なければならぬ。一つは、出来るだけ正しい筆順を書かなければならぬ。・・・文字は大体、新聞の字を信頼してもよろしい。嘘字を書いてはいけません。・・・それから、手が達者でなければいかん。・・・筆は真直ぐにもつて、同じ太さの字を書く練習をしなければならぬ。・・・もう一つは、・・・平均に線を組み合わせて、そして線そのものは平らでなければならぬ。・・・私は、字というものは、どこまでも平明に書かなければならぬと思つてゐる。・・・字を書きたいという人に向かひましては、・・・手本などはいらないから、ただ線をお書きなさいという。・・・字を書きたいという人に向かひましては、・・・平行線を書け。・・・それから横に書かせるのです。・・・右からでも、左からでも、楽に書けるやうにしなければならぬ。・・・垂直線と水平線のほかに、・・・曲線を、やはり稽古しなければならぬ。・・・相等しい渦巻きを書くこと、中から外へ書いたならば、今度は反対に外から中へ書く。・・・さういふものを楽に書き得るものが、字を書くとき、・・・役立つから、・・・電車の中で、・・・私は、ステッキが垂直に地球に向かつて垂れているやうに手を動かす稽古をしていた。・・・私はいつも、電車の中でも、また人と話をしている時でも、さうやって渦巻きを書きながら手習いをしたものです。・・・」(昭和22年春、会津八一「書道について」講演から抜粋)



八一筆

「縁日芸人が、見学の鼻先で剣舞するが如し」  
(会津八一『魯山人の作品評』)

「……書道を末長くやるには気長にやらないといけない。決して一片の風流心とか安直な『趣味』などに囚はれてはいけない。また私の門下だといっても、私に似たらそれでいいといふやうなことではない。私は誰に似たのでもなく、数十年かかって文字と書道を歴史的に研究して、その中から独特のものを見出して一家の風を開いた。私の真似をするなら、その態度を真似するのが一番大切です。……気長に根本的に工夫を凝して一生の仕事としてかからないといけません。一寸見て、すぐ感じがいいとか、趣味に共鳴したなどといふことは、門外漢とか初学者のよくいふことです。もっと深く目をさましていくらか骨の折れる態度の修行を積んで、もっと深いところに趣味の満足を得られるやうにありたいものです。……」(昭和24年4月1日付、八一から福田雅之助宛葉書より)

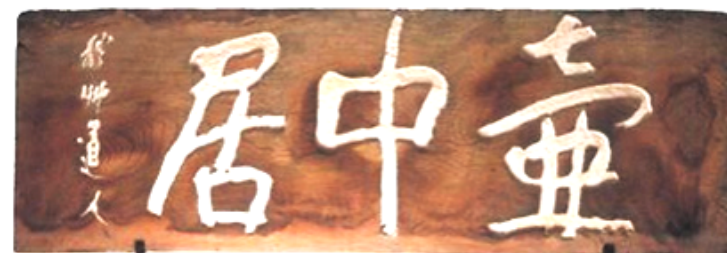
あきしのの みてらをいでて かへりみる  
いこまがたけに ひはおちむとす  
荒廃した秋篠寺を詠んだ歌



初対面の会津八一と篠田桃紅 (1950年代初め頃)

「会津八一氏から絶交状をもらってしまい、お詫びをしたいと思いつながら果たせないうちに、会津氏は亡くなりました。今も私の心残り、この後も、ずっと心残りが続くことと思う。……会津氏の書は、……まだ戦時中、知人のある夫人の家で見たのが最初で、その時以来このお方の書は、私にはたいそう気になる書であった。……その書は、私の心を打ち、目にやき付いた。歌は前に活字で読んだことがあったが、その書は今まで見たこともないという書であった。古法帖や古筆のたぐいとも、近代現代のどういいう書とも違っていた。……」  
(篠田桃紅『桃紅(私というひと)』「ゆかりのおひと—会津八一氏」より)

「天地にわれ一人いて立つとき この寂しさを君は微笑む」歌人の会津八一が、法隆寺夢殿の救世観音を詠んだ歌を桃紅さんは引用しながら、観音様を君と詠む作者に限りなく共感されているのだった。一人で立っているという会津八一の孤独と同じものを、たおやめの桃紅さんも持ち続けていた。それだからこそ、いつまでも美術家として現役なのだと思う。(作家・太田治子が読む『一〇三歳になつてわかったこと 人生は一人でも面白い』(篠田桃紅著)より抜粋)



八一筆「壺中居」木額 昭和4年(1929) 62×187.5 cm

(株)壺中居蔵 彫師は稲葉翠哲 壺中居は日本橋3丁目にある東洋古美術店

「……世間で手習といふけれども、手習をするといふと、まづ先生を選んで、そして手本を選んでもらって、それを手本通りに書くことと思つてゐるやうですが、実に馬鹿な話である。手習いといふことは、読んで字の如く、手を習ふことである。字を書くこの手を習はなければいけないのである。手を習ふといふことは、手の筋肉を、何千字書いてもこれに耐へるやうに訓練すること。出来るならば力強く、然しながら、平らかに動かすところの力を手に養はせることが、手習いである。世間でいふが如きものは、眼習いである。習字の手本を見て、それと同じものを書くといふことは、類似品を作ることであつて、悪くいふならば、贋物を作るだけのことであつて、手本を書いた人の人格とか、時代とか、その人の趣味とかいふものを何も構ひなしに、ただ手本の字をそっくりそのまま書かうと一生懸命になつてゐる、だから、眼の方の練習になるか知れぬが、字といふものは、そんなことでは学ぶことは出来ない。……手本などはいらないから、ただ線をお書きなさい。……」  
(昭和22年春、会津八一新潟史談会講演「書道について」より)

「詩と書との、まったく連関と一致を、めざすことについて、これほど意識的であつたといふことは、そのまゝ、かれの書風のきびしい独創への追求につながつていた」  
(宮川寅雄『會津八一の文学』より)



山田正平刻「会津八一印」「渾齋」の一对